
かけっこが得意なアリさん

sagitta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かけっこが得意なアリさん

【Nコード】

N5514A

【作者名】

sagittata

【あらすじ】

かけっこが得意なアリさんは、草原の果てまで走っていきこうと思いたちます。途中で色々なものに出会って――。

かけっこが得意なアリさん（前書き）

大人も楽しめる童話を目指しました。

連載作品ですが、一話だけでも成立しています。

かけっこが得意なアリさん

ある都会の住宅街の真ん中の小さな一軒家の、猫の額ほどの小さな庭。

そこに、とつてもかけっこが得意なアリさんがいました。

仲間の中には誰一人、彼とかけっこをして勝てる者はありませんでした。

仲間たちは彼を羨ましがって口々に言います。

「君はいいなあ。そんなに速くかけることができたら、きっと、とても遠くまでいけるだろうに。この広い草原のずっとずっと向こうまで見に行くことができるのだろうなあ」

みんなに褒められて、アリさんは得意になって言いました。

「へへっ、思いつきり走ったら、草原の果てまで行けるかもしれないな」

その言葉を聞いて、仲間のアリたちは大喜びで触角を鳴らしました。

「行ってみてよ、草原の果てに。それで、果てがどうだったか、僕たちに教えておくれよ」

アリさんは、嬉しくなっただきくうなずいて、すぐに走り出しました。惚れ惚れするような、力強い走りでした。仲間のアリたちは、六本の足を踏み鳴らしてアリさんを送り出しました。

背の高い草の間をくぐり抜け快調に走るアリさんは、みるみるうちに草原の奥に入っていました。アリさんはそれまで、自分の巣の周りの狭い範囲しか行ったことがありませんでしたから、こんな奥までやってきたのは初めてでした。

はじめて来た草原の奥には、小さな赤い実をつけた細長い草や、アリさんたちの仲間とは少し違う、赤い肌をした小さなアリや、その他、見たこともないものがたくさんありました。

「わあ、こんなにすごい景色を見ることができると、僕は本当に、足が速くてよかったなあ」

うれしくなったアリさんは、そのまま、ずっと走り続けました。何日も何日も、走り続けました。どんどんと草原の奥に入っていて、見たこともない風景を見るのが、楽しくて仕方ありませんでした。

どれほど走ったでしょうか。ずっと走っていてさすがに少し疲れたアリさんは、ちよつと休憩しようと思って、手近な葉っぱの下に腰を下ろしました。

ふうと息を吐いたアリさんが、細長い葉っぱの先に付いた雫がきらきらと輝くのなどを眺めていますと、ぴよんと視線をさえぎる影がありました。葉っぱと見間違えてしまいそうな、緑色の肌に細長いからだ。それにぴんと伸びた長い足。アリさんは見たことがありませんでしたが、それはバツタでした。バツタのうちでもうんと足の速い精霊バツタが、お昼ごはんを求めて、やってきたのでした。「やあやあ、アリさん。この辺じゃ見かけない顔だけど、どこから来たんだい？」

細長い顔のバツタが、人懐こそうにアリさんに話しかけてきました。

「これはこれははじめまして。僕はずっと遠くから、ここまで来たんです。僕は足が速いから、みんなが行くことができない遠くまで、こうして走ってきたんですよ」

アリさんは、誇らしげに言いました。それを聞いたバツタが、おかしそうに触角を震わせてクスクスと笑います。

「遠くって？ いったいどれほど遠くなんだい？ 君が元いたところはどんなところか、教えちゃくれないかね？」

アリさんは、バツタがなぜそんなふうに笑っているのか検討もつかなくて、首をかしげながら答えました。

「僕が来たのはうんと遠くだから、きっとあなたは知らないでしょうよ」

「アリスさんがそう言うのと、バツタは今度はからだじゅうを震わせて笑いました。」

「あつはつは。いいからどんなところか、教えておくれよ」

「相変わらずバツタが笑っているわけは分かりませんでした。気のいいアリスさんは、自分のいたところがどんなところか、バツタに教えてあげることになりました。」

「僕が来たところはね、タンポポがたくさん生えているんです。タンポポといっても、あなたは見たことがないでしょうから、わからないかな。タンポポってのは、黄色くておしゃべりな、恥ずかしがり屋の花のことです。今の時期なんかは、黄色い大きな花が、こそこそとお喋りしながら揺れていて、とっても楽しいんですよ」

「アリスさんは得意げに話しました。バツタは、それを聞いて、ギイギイと、大きな声を立てて、笑いころげました。さすがの気のいいアリスさんも、ちよつと気分が悪くなるような笑い方でした。」

「あなたは、どうしてそんな風に笑っているのですか？」

「少しだけむっとした口調でアリスさんがたずねると、バツタは、全身を震わせながらこう言いました。」

「そのタンポポは、オイラの今日の朝ごはんだったよ」

「バツタは、その長い足でぴょんぴょんと大きく跳び、アリスさんが何日もかけてたどり着いた道のりを、ほんの数時間で行って帰ってきてしまったのでした。」

「今まで自分の足の速さを誇らしく思っていたアリスさんは、急に恥ずかしくなつてうつむきました。」

「で？ アリスさんはこれからどこへ行くつもりなんだい？」

「バツタは相変わらず笑いながら、がっかりしているアリスさんに尋ねます。」

「この草原の果てまで、行ってこようと思っていたんですけど、すっかり元気をなくしてしまったアリスさんは、ため息をつきながら言いました。バツタがそれを聞いて、さもおかしそうに身体を震わせます。」

「草原の果て！ やめておきなよ、アリさん。オイラは何度も草原の果てまで行っているけれど、あそこには何にもありやしないよ。ただこのことと同じような風景が広がっているだけさ」

「ご忠告ありがとう。もう一度どうするか、考えてみますよ」

元氣のない声でアリさんが応えたと、バツタは満足したように、ぴょん、と地面を蹴って去っていきました。

なんて惚れ惚れするような、大きな大きなジャンプなんだろう。あれに比べたら、僕の足の速さなんてちっぽけなものにすぎないなあ。アリさんはそう思って、ふうとため息をつきました。

「これからどうしようかな」

途方に暮れたアリさんが、ぼつりと呟きました。

「さっきの彼が言ってたみたいに、草原の果てに行ったところで、何にもないのかな」

薄緑色の、細長い葉っぱの下に腰を下ろしたまま、アリさんは一人で考えつづけます。

「このまま帰っちゃったほうが、いいのかな」

「アリさんアリさん、何を悩んでいるんだい？」

不意に、アリさんの足元で声が聞こえました。それはちっちゃな、気を抜くと聞き漏らしてしまいそうな風のような声でした。

声の主は小さなアリさんよりももっと小さな、透きとおった緑色の肌のアオムシでした。

アオムシは、アリさんの足元で、その小さな身体をいっぱいに動かしてちよつとずつちよつとずつ歩いていました。

「ねえアリさん。何を悩んでいるの？」

ゆっくりゆっくり一生懸命歩きながら、アオムシはアリさんにもう一度尋ねました。

「こんにちは、アオムシさん。あのね、僕は草原の果てまで行こうと思っていたんです」

「草原の果て！」

アオムシはびっくりして身体を伸びたり縮んだりさせました。

「それはそれは遠くまで行くんだねえ。そうしたら、見たこともない風景が、うんと広がっているんだろうねえ」

アオムシが言っと、アリさんは悲しそうに首を横に振りました。

「僕もそう思ってたんです。でもバツタさんが言うには、草原の果てまで行ったって、何にもありやしないって」

「何にもありやしないだって？ そんなことあるもんかい！」

アオムシは、とんでもない、とばかりに細長い身体を震わせました。

「そんなに遠くまで行ったらば、さぞや新しい発見がたくさんあるに違いないさ」

そういいながらもアオムシは、ゆっくりゆっくり一生懸命歩いています。アリさんも立ち上がって、アオムシの速度に合わせるようにゆっくりと歩き始めました。

「アオムシさんは、どこへ行くんです？」

アリさんが尋ねると、アオムシは待つてましたとばかりに得意げに体を伸ばしました。

「私もね、草原の果てまで行くつもりなんだよ」

「アオムシさんも？」

その言葉にアリさんは、びっくり仰天してしまいました。

だってアオムシはお世辞にも歩くのが早くありません。さっきからずっと頑張つて体を動かしているけれど、進んだのはほんのちよつとだけ。これでは草原の果てに着くまでに、いったいどれだけ途方もない時間がかかるでしょうか。

「あっ！」

急に、アオムシが立ち止まって大きな声を出しました。いや、アオムシの声はとてもちっちゃな、風のような声でしたから、大きな声と言っただけでせいぜい、急に吹いた突風の音くらいの大きさです。でも、とにかく彼にしては大きな声を出して、アオムシは立ち止まったのでした。

「どうしたんです？」

アリスさんが首をかしげてアオムシに尋ねました。

「ほら！ ほら！ アリスさん、私はまた、新しい発見をしたよ！」
興奮した声に、アリスさんは身を乗り出してアオムシが指差す方を覗き込みました。

けれどそこにあつたのは、何の変哲もない、まるい葉っぱをつけたクローバーでした。

「アオムシさん、残念だけど、これは新しい発見ではありませんよ。この葉っぱならこの辺りにはいくらでもあります。ほら、あっちにも」

「そうじゃないよ」

顔を上げて周りを見回したアリスさんの声をさえぎって、アオムシは目の前のクローバーをいとおしそうに見つめています。

「え？」

「ほら、よく見てごらんよ。このクローバーはね……」

アオムシの言葉に誘われて、アリスさんはもう一度、足元のクローバーを覗き込みました。

「あ、本当だ」

「ね？」

納得したふうな顔になったアリスさんに、アオムシが満足そうに微笑みました。

「このクローバー、葉っぱが4枚あるんだよ」

「僕、全然気がつきませんでした」

「ゆっくり歩いていないと、気がつかないものもあるんだ」

アオムシがちよっと誇らしげに、透きとおった緑の体を伸ばして、アリスさんに笑いかけました。

「さあ、アリスさん。一緒に、草原の果てまで行ってみませんか？」

アリスさんは胸を張って、大きく頷きました。

「ええ、もちろんですとも！」

雨の草原で

草原の果てを目指すアリスさんとアオムシは、今日も歩き続けていました。アオムシの歩く速さに合わせて、ゆっくりとふたりは進んでいきます。

時折、背の高い草にまぎれてそつと咲く小さな花や、風にゆらゆらと揺れる、丸くて青い草の実や、でこぼこな土の上をせわしなく駆けては何かに驚いてまん丸になっているダンゴムシを見つけては、ゆったりとそれを眺めたりするもんですからなかなか先に進みません。

けれども、それでもふたりは少しずつですが確実に、前に向かって進んでいたのです。

ある日、草原に雨が降りました。きらきらと透き通った水のしずくが茶色い地面や背の高いまつすぐな草なんかにはぶつかっては弾け、小さなかけらをあたりに飛び散らせている、激しい雨でした。

激しい雨の中でも、アリスさんとアオムシは休むことなく歩き続けていました。草原の中で育ったふたりにとって、雨はともだちなのでした。冷たい天然のシャワーが二人のからだを優しく伝い、洗い流していました。気持ちよさそうに目を細めてそれを受け止めながら、ふたりは歩いていきました。

「雨が降ると、一度見た景色もまた新しい景色になりますね」

アリスさんが微笑みながら言うと、アオムシはからだを伸び縮みさせてうなずきました。

「そうだね。ほら、この黄色い花なんて、雨のしずくできらきらと輝いて、まるで宝石のようだよ」

「あ、本当ですね。僕はね、雨の日が大好きなんです。みんなが優しい水のしずくで、きらきら、きらきらと、喜んでいる気がするんです」

そんなことを言いながら、二人がさらに歩いていきますと、やが

てゴウゴウというかすかな音が聞こえてきました。

「あつ、アオムシさん。あそこのところ、川みたいになっていますよ」

そう言ってアリスさんが、道の先を指差しました。アオムシも、その透き通った緑のからだをいっぱいに伸ばして道の先に目を凝らします。

アリスさんの言ったとおり、道の先は降り注ぐ大粒の雨のために、茶色く濁った水がゴウゴウと音を立てて流れる川のようになっていました。

「大変だ！ あれでは先に進めませんよ」

アリスさんが、あわてたように言いました。

雨によってできた川は、とてもとても小さなものでしたが、アリスさんやアオムシにとってはじゅうぶんに大きく、また流れも速いものでしたので、とても渡ることはできなそうでした。

「あれ、川のところには誰がいるよ」

アオムシが、がっかりしてうなだれているアリスさんに声をかけました。

その言葉に、アリスさんがゆっくりと顔を上げます。

川のほとりでしゃがみこんでいたのは、前にアリスさんが出会った、精霊バツタでした。

「やあ、アリスさんじゃないか。それにアオムシさんも」

二人に気づいたバツタが、親しげに声をかけてきました。

「これはこれはバツタさん。こんなところで何をしています？」

「いや、草原の向こうまで昼ごはんを食べに行こうと思っていただけだね。でもこんなになっているんじゃない、いくらオイラでも渡れないやと思ってね」

バツタが、ひよいと肩をすくめてみせます。その言葉に、アリスさんがさらにがっかりした顔になりました。

「バツタさんでも無理なんですか……」

「うん。だから、今日は諦めて帰ることにするよ。君たちも諦めた

ほうがいいと思うよ」

そう言いながらバツタは、ぴょん、と地面を蹴って去っていきました。相変わらず、素晴らしい跳びっぷりでした。

去っていくバツタの姿を見送ったアリさんは、ゴウゴウと音を立てるコーヒー牛乳のような色の川を見つめてふう、とため息をつきました。

「僕たちでは、この川を渡ることはできませんよねえ」

「じゃあ、待っていていようよ」

力のない声でつぶやいたアリさんに、アオムシが普段と変わらない、明るい小さな声で言います。

「待っている？ 何をです？」

不思議そうな顔で聞き返したアリさんに、アオムシが嬉しそうに体を震わせて答えました。

「雨がやむのを、だよ」

それを聞いたアリさんが、灰色の空を見上げました。分厚く重なった重そうな雲からは、水色の雨のしずくがとめどなく流れ落ちてきています。

「やみそうには、ありませんよ？」

不安そうなアリさんを慰めるように、その透き通った緑の体をゆっくりと横に振って、アオムシは風のようなかなかな声で優しく言いました。

「そんなことはないさ。やまない雨なんて、ないんだよ」

ふたりは、川のほとりに腰をかけて、ゆっくりと雨がやむのを待ち続けることにしました。

待つことを決めた二人には、時間はたつぷりとあります。今までゆっくりとは言え歩き続けていましたから、こうして腰をかけてじつくりとあたりを見渡す機会はありませんでした。

立ち止まってふとあたりを眺めてみると、今まで見えなかった細かなことまで見えてくるのです。

雨のしずくが川に飛び込むときにできる小さな輪っかの数が、ちよつとずつ違うこと。

細長い緑の葉っぱが雨のしずくを受け止め、それがだんだんと葉っぱの先に集まって、ぽちゃん、と澄んだ音を立てて川に落ちることに。

じつとりと濡れた青い小さな花が優しい風に吹かれて身を震わせると、細かくなった水の粒をまわりに飛び散らせ、それが静かに煙になって空に昇っていくこと。

そんなことは、ゆっくりと腰を下ろしてじつくりと周りを見渡さないで見えないものでした。

長い長い時間が経ちました。

二人は飽きることもなく、雨に濡れた花や地面や川を見渡してははしゃいだ声を上げています。

ふと、アリさんが空を見上げました。

「あ、雨がやんでいますよ！」

いつの間にか、分厚い雲は薄くなり、降り続けていた雨はやんでいました。

「ね、やまない雨はないでしょ？」

得意そうに、アオムシが言います。

雨でできた小さな川はまだ残っていました。流れが緩やかになってゴウゴウという音もなくなり、水の量もだんだんと少なくなっていくのがわかりました。

空もだんだんと明るくなっていました。薄い雲の隙間から、柔らかなで暖かい午後の日差しが、静かに顔を出します。

「あ、ねえ、見てごらんよ」

アオムシが体を伸ばして、空を見上げながら言いました。

「どうしたんですか？」

「虹が、出ているよ」

嬉しそうなアオムシの言葉に、アリさんも空を見上げました。

七色の虹が、うす明るくなった空のキャンバスに架かっています。

それはとてもとても美しく、まるで神様がふたりにくれた、素敵なプレゼントのようでした。

草原の果てに

やまない雨がないうちに、沈まない太陽がないうちに、終わらない旅はありません。

ゆつくりのんびりと行くアリさんとアオムシの旅にも、やがて終わりが見えてきました。

草原の果ては、唐突に目の前に現れました。

絡み合う草のトンネルを抜けたアリさんたちの前に、灰色で真四角な、天までそびえる大きな大きな壁。

それは小さな庭を囲む、コンクリートの塀だったのですが、そんなことはアリさんたちにはわかりません。

「ここが、草原の果てかぁ。あまり素敵なところではありませんね

……」

呟くアリさんの声に、いつもの元気はありません。

どこまでも直線で、薄汚れた固くて冷たい壁は、青々とした生命にあふれた草花や生き物たちに比べて、あまり美しくないものであるように見えました。

一生懸命歩いてきて、やっとたどり着いた草原の果てに、とても美しく素晴らしい場所を想像していたアリさんは、ちょっと拍子抜けしてしまっていたのでした。

「そんなことはないよ。ここはとても、素敵なところなのさ」

アオムシが、さもうれしそうにからだを震わせます。

「でも、ここには優しい葉っぱも、かわいらしい虫も、きれいなしずくもありませんよ？」

困ったようにアリさんが言うと、アオムシがミドリのからだを伸ばして、上を差します。

「ほら、見てごらんよ」

「上、ですか？……わぁ」

うながされるままに空を見上げたアリさんは、歓声を上げました。

そこには、黄色や紫や白の、色とりどりのチョウチョがその美しい羽根を広げて優雅に舞っていました。

その数は、十を軽く越えていて、そこはまるで、チョウチョの楽園のようでした。

ひらひら、ひらひらと優雅に舞うチョウチョたちが、驚いたように青空を見上げているアリさんとアオムシの周りに集まってきました。

「あらあら、あなたはタンポポ畑のアリさんね。こんなところまで来て、どうしたの？」

黄色と黒の、透き通った見事な羽根のチョウチョが、鈴が鳴るような可愛らしい声でアリさんにたずねました。

アリさんたちがやつのことでたどり着いた草原の果てまでの道のりは、彼女たちにとってはお散歩のコースなのでした。

でも、もうアリさんは落ち込んだりしません。チョウチョたちには見えないものがあるとすれば、アリさんたちにしか見えない素敵なものだつてきつとあるのですから。

「僕は、いろいろなものを見るためにタンポポ畑からここまで歩いてきたんです。今までに見たこともない、素敵なものに、たくさん出会うことができましたよ」

ちよつと誇らしげに、アリさんが胸を張ります。

チョウチョはくすくすと、そよ風のようにかすかに笑って、美しい羽根を小さく震わせました。

キラキラ、キラキラとお日様の光を反射して黄金色に輝く粉が、彼女の羽から無数に舞い散って、それはそれはきれいでした。

「素敵な旅をしてきたのね。そちらの方も一緒に？」

「は、はいっ！」

優雅な声でチョウチョが尋ねると、アオムシはちよつとだけ赤くなりながら、急いで答えました。

「うふふ、かわいらしいお嬢さんね」

チヨウチヨはまた、そよ風のように笑います。

アリさんは、驚いたようにアオムシの方を見ました。

「アオムシさん、あなたは女の子だったんですね？」

アオムシはちよつと恥ずかしそうに、はにかみながらうなずきました。

そして、憧れのこもったきらきらした瞳でチヨウチヨたちを見つめ、それからふと思い出したようにちよつとだけさびしそうな顔になりました。

アオムシはそのすきとおった若葉色をしたからだを伸ばして、アリさんの方に向き直りました。

「アリさん、ボクは君とお別れしなきゃならないんだ」

「お別れ、ですか？」

驚いたように、アリさんが聞き返します。

アオムシは、ゆっくりと全身でうなずきました。

「ボクはね……ここで、チヨウチヨになるんだ」

アオムシがはにかんだ笑顔を浮かべながらつぶやいた言葉に、アリさんが目を丸くします。

「チヨウチヨに？ アオムシさんは、あのキラキラしたきれいなチヨウチヨに、なるのですか？」

アリさんは、はあく、とため息をついて空を見上げました。そこには今も、色とりどりの鮮やかなチヨウチヨたちがひらひらと、青色の中を漂っておりまして。

「……だけど」

アリさんの声がちよつとだけ弱弱しく、小さくなります。

「お別れ、しなくてはいけないんですね……。ずっと一緒にいられるような、そんな風に僕、思ってしまった」

言いながらアリさんは、だんだんとうつぶむいてしまします。

「……ねえ、アリさん。君はこれからどうするんだい？」

アオムシが少しだけ声を裏返ししながらアリさんに尋ねます。その声にアリさんは、わずかに顔を上げました。

「これから？ ええっと……」

「アリさんは少しかだけ考え込んで、

「僕は、もといた所に帰りますよ。家族や仲間たちが、待っていますから」

と答えました。それは消え入りそうな小さな声でしたが、話すうちにアリさんは自分の言葉にはっとしたように顔を上げます。

「そうだ、僕は仲間たちに、この旅のことをたくさん話してあげてほしい。見たこともないものにたくさん出会ったことや、いつも気づかなかったことに気づけたことや、それに……アオムシさんのことを。ふるさとで待っている仲間たちに、たくさんたくさん、教えてあげるんです」

アリさんは胸の中に浮かんだ思いを急いでアオムシに伝えたくて、少し早口になって言いました。その声はもう、消え入りそうなものではありません。

「それは、とても素敵なことだね」

アオムシはうれしそうに、静かにうなずきます。

「ねえ、アリさん。ボクはここで君とお別れすることになるけど、どうか悲しまないで。これからボクはボクにしか見れないものを見ていくし、君は君にしか見えないものを見ていくんだよ。それで、たくさん時間はかかるかもしれないけれど、ボクがいつか、キラキラしたきれいなチョウチョになることができれば、ボクは君の住むところへ、飛んでいくから」

そう言って、アオムシはアリさんの目をまっすぐに見つめました。アリさんも、アオムシの透き通った目を、黙って見つめます。

ふたりは同時に、静かに微笑みました。

『その時に、また』

それからふたりは、くるりとお互いに背を向けて歩き出しました。それぞれの道に向かって。

空を見上げれば、ふたりの新しい旅立ちを祝福するように、チョ

ウチヨたちがひらひらと優雅に舞い、優しい太陽の光がさらさら、さらさらとふりそそいでいました。

草原の果てに（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5514a/>

かけっこが得意なアリさん

2011年5月10日17時40分発行